

新刊紹介

Bibliographie Banddhigye, I.

(Janvier 1928—Mai 1929.)

Buddhica II, Tome 3. pp. XII+64,
Pard, 1930.

日本にも最近兩三年來佛教年鑑の發行を見るが、本書は佛教研究界の年刊書籍目録であり、且世界中の研究成果を報告する點に於いて、趣を異にしてゐる。本書の出版の意圖は言ふまでもなく、世界中の佛教研究者が相互にその研究成果を探知し得て、一面無駄な骨折を除き、他面共同の進路を開拓する便益のためである。

内容は八部に分けられ、一、概説、二、原典・翻譯・目錄・辭書・語彙、三、言語・解釋、四、歴史傳播、五、傳説・教理・哲學、六、規律・儀式、七、美術・考古學・碑文、八、現代とされる。此の分類法には第二・第五等に無理な感ずる。第六の如き別出の要を見ない。而して各部に於いて著書・主要なる雜誌論文の題名・著者名等を挙げ更に内容の極めて簡単な概要を示してゐる。その配列順序は雜然としてなり、僅かに著者名の索引によつて見出の方法を與へられてゐるのみ。

日本の著書・論文は主として友松圓諦氏が分擔せられてゐる

豊満先生を偲ぶ

が、滯歐中には不便なりし點にも據るであらうが、出すべくして出てゐないものも存すると思ふ。特に日本・支那における研究は漢字にて著書著者名等を出すべきであり、編者の勝手な書名の變更は慎むべきであらう。例へば赤沼智善氏の「漢巴四部四阿含互照錄」を「Kanyaku agon to Pāṇikāya no taisho」とせる如き最もいけなく書名を混亂させるのみである。更に全體として粗雑な感じを與へ、誤植が隨處に見出されること(三頁左、末行 Saṅkhyoga は ya を脱す如く)、著者名索引中に泉氏を Idumi と Izumi として二度出せる如き、更に甚しきは宗教研究所載論文を全部(?)佛教研究(略符B)所載とせるが如き、驚くべき錯誤振りである。勿論第二冊、第三冊と進むに従つて内容の充實することを豫想することには於て、かくの如き年刊書籍目録の發刊を欣ぶに吝なるものではない。(龍山)

B. Nanjo & H. Idzumi, (Editors)

The *Suvarṇaprabhāsa Sūtra*.

pp. XXVIII+222, The Eastern Buddhist

Society, Kyoto 1931. ¥ 10.

梵文金光明經が久しい間の期待の後に漸かく出版せられた。此の校訂本は故南條博士が滯英中、パリーの國民圖書館の寫本による前半とロンドンの帝室アジア協會の寫本による後半とを後にケムブリッヂ大學の一本と校合し、歸朝後東西の帝國大學藏の梵本と校訂せられしものを底本とし、更に博士の後を享け

て泉教授が漢譯の三本及び藏譯の三本と對校訂正せられたものである。本經の梵本は第十五章迄は既に印度の Buddhist Text Society より出版せられてゐるが、之は極めて粗雑にして用に耐へぬ由であるから、此度の校訂本は佛教研究者に對して缺くべからざるものとなるであらう。

本原典は前述の如き次第を経て完成されたものであるから、その信用價值に於いては更めて云々する必要はないのであるが、今同書の序論によつて大乘經典の一としての本經の重要性を少し述べたいと思ふ。漢譯には、

(1) 北凉、曇無讖譯、金光明經、四卷。

(2) 隋、寶貴合、合部金光明經、八卷。

(3) 唐義淨譯、金光明最勝王經、一〇卷。

の三譯あり、中第二は新譯に非る故、現存は二譯となる。藏譯の三本は、

(1) 譯者不明の一本。梵本と合す。

(2) Jñānita, Śīlendrābodhi, Yeśeda 譯、義淨譯と同一原典らし

(3) Chos grub 譯、義淨譯の重譯。

その他義淨譯のウィゲル重譯、(Bib. Ind. XVII, 1913—7)あり、又ベリオ出版のコータン語譯の断片あり、その他にも西域語譯の諸本が存する等の點より見て、本經が廣く讀誦されたことが觀取される。故に原典そのものに發展増加が行なはれたことは當然で、校訂者の意見によれば、梵本の第二—第六章が本經の最も基本的部分をなし、その他は附加部分であるとなされ

てゐる。而して曇無讖譯及び之と大體的に一致する梵本、並びに西藏第一譯が古形であり、義淨譯は更に充分に増加添飾されたものであることは何人にも容易に首肯されることである。校訂者は梵本と三漢譯との章による對照表を掲げて此の關係を明らかにしてゐる。

經そのもの、發展よりも更に興味あるは、本經と他の大乘經典との關係であると思ふ。此の點に關する出版者の論議を一瞥する。先づ誰もが氣附くのは本經と法華經との類似であつて、「佛は般涅槃せず法は損減せざるも、衆生を成就する爲めの故に、涅槃を示現す」といふ思想は、兩經に殆んどバラレルな言葉によつて述べられ、又法華經の多寶塔・龍女成佛の挿話に似たる物語は本經中に發見される。又華嚴經との關係に就いては本經第四章と普賢行願贊との文を引いて相似を示し、般若經の空思想は又本經に於いて總括的に略して説かれてゐるのを見る次第である。さて本經が上述の三大乘經を豫想してゐることを示した後、「實に大乘が殆んど十分に形成せられしは、本經の如きものがその本質的なものを具現して現はるゝのは全く當を得たものと思はるゝ。恐らく此の故にこそ、最も勝れし主經(utama-sūtrendra-jñā)と呼ばれたのであらう。」(序二十三—四頁)と言ふは正しいと考へられる。此の事は本經が學的よりも寧ろ實踐的な大乘教理の宣揚を目的とする點よりも觀取される。

本書が、世界の佛教學界を擧げて歩みつゝある大乘佛教への

歩みに一つの大きな足跡を印したことは何人も疑ひえない點である。(龍山)

P. Peterson;

The Nāyabindu-Tikā of

Dharmottara Ācārya,

(Bibliotheca Indica, Work No. 128) pp.

XV + 134. Re-issue, 1929, Calcutta, 2 Rs

本書の初版は一八八九年に出版せられ、その後久しく絶版となつてゐたが、今回舊版のまゝのものを再上梓したのである。

その間一九一八年には T. Stecherbatsky によつて校訂本が出版せられたが、本文のみにして Variant 等を出すべき第二分冊は十年以上を経たる今日にも未だ出版せられない。それとはにかくとして、本書の初版が Nāyabindu-tikā の最初の出版なりし點からも、ロシア本との比較のためにも、又印度文庫第二三〇篇 S. C. Vidyahyana : the Bilingual Index to the Nāyabindu, が此出版本を底本としてゐる點からも、再上梓は意義あることと考へられる。頁數、行數等も初版と少しの相違もなく、又ロシア本に比すれば極めて低廉なる點も我々に便利なる譯である。(龍山)

梵文佛傳文學の研究

木村泰賢 共著
平等通昭

「梵文佛傳文學の研究」は前後二篇より成り、前篇は「馬鳴及び梵文佛所行讃の研究」、後篇は「梵文大事譬喻譚の研究」と題される。而して前篇は木村博士の校閲を経たる平等氏の研究成果で、全六篇よりなる。第一篇序論、第二篇佛所行讃の作者馬鳴とその製作、第三篇本典批判と他國語譯註釋、第四篇佛所行讃の思想、第五篇梵文佛所行讃の表現、及び結論を含む、此の中第二、第四―五が主要部分をなすと思ふ。後篇は四篇の論文を集めたもので、いづれも既に宗教研究及び現代佛教誌上に平等氏の名に於いて發表されたものである。今奇妙にも木村博士との共著とさるゝは、博士亡き後なるが故にではないが、奇異の感をいだかしめらるゝ。故に後篇は今除くこととする。

さて本書に於いて全體としての有機的關係のないことが著しく目立つ。論集ならば論集でいいのである。然し本書は論集でなく一つの綜合的著述であるにもかゝらず、一一一―八頁と四二―三四頁に梵藏漢對照表が重出さるゝことや、更に甚しきは五六五―七四頁の大事譬喻譚に關する解説がそのまゝ、一四八―五六頁に挿入されてゐるが如きことによつて、その全體的緊密性を破壊されてゐる。今少し再考の餘地があつた筈だと思ふ。次に著者は序論に於いて宗教藝術として佛所行讃を研究することを宣し、更に個々の分析的研究をなして後「別個になした各部の研究を總合し、夫に基いて批評觀賞し、宗教藝術としての佛所行讃の價值を定めたいと思ふ」(一六頁)由を述べてゐる。之は誠にかくあるべきことである。然るに第三―五篇に於いて

分析的研究を爲して後、何等の總合的研究なくして、結論に至つてゐる。私は此處に非常な失望を感じたのみならず、不満をも抱かざるを得ないのである。單に宗教と藝術との融合の境地と言ふのみではいけない、不充分である。如何に佛所行讃が宗教的に我等を動かすか、又その理由は如何なる點に存するか、そして一般に宗教藝術としての價值が佛所行讃に於いては如何なる特殊なものとして認めらるゝか、等の問題が、佛傳文學の研究としては必要なことである。此處で明らかに述べたいことは佛傳の研究と佛傳文學の研究との明瞭な區別を意識して欲しいのである。勿論佛傳の研究は佛傳文學を離れて存するにあらざることは明瞭だが、それは歴史的佛陀の行跡の研究であつて、未だ文學的作品としての對象はそこに存しない筈である。之に反して佛傳文學の研究は明らかに文學的作品としての對象を取扱ふのである。今の場合には *kyōka* (宮廷詩) として取扱ふことなどはその一部分である。かゝる取扱ひ方として第五篇の表現形式の研究は日本に於いては最初の試みであり、本書中光を放つてゐる部分である。これはダンディンの *kyōdōka* (詩鑑) に於ける修辭學の規定に従ひつゝ、佛所行讃の中より一々引用して説明したものである。此の方法は大體承認しうと思ふ。

とにかく菊判八百頁に餘る大冊であり、索引の豊富な點から著者の努力の大なりしことは認められ、こゝに一本の惠與を賜はつたので不取敢感想の一部を記して、廣く本書を薦めたいと思ふ。學界の先輩に對して失禮の言を述べしこと、一に學究

者としての情熱の一端のみ、御許しを乞ふ。(昭和五年、岩波書店發行、五圓八拾錢)(龍山)

密教概論 高神覺昇著

日本佛教はその興隆の當初より既に二大思想系統を有してゐた。即ち一は傳教大師を祖とする天台顯教(尤も台密なるものが存在するが)であり、他は弘法大師を祖とする眞言密教である。

既に支那に於ても所謂華天密禪の四家大乘は實大乘として全佛教思想界に君臨したのであるが、由來他の三者に比して、その教義の幽玄複雑なる爲か、最も難解なるもの密教に過ぐるはない。而して兎もすれば密教を以て佛教の純粹なるものに非ず等とする傾がないでもない。此の曲解された眞言密教(特に日本の)をして、その眞相を開示して正しき相に於て密教を現はさんとの念願によつてものせられたのが本書である。

從來の密教に關する書が、多くその傳統的解説を出でぬ物足らなさを感じた著者は、飽く迄傳統を尊重しつゝ、而も又一方新しき時代の要求を顧慮して、現代哲學的思考方法を用ひて思索し、翫味して此の祕密の扉を自由に大膽に開放したものである。本書は組織に就いて、著者は自ら考ふる所あつて専ら教相の問題のみを取扱つて、歴史の方面は全然除かれてある。而してその教理論は、教判論、教理論、佛身論、成佛論の四部門に分

たれて、簡潔に――寧ろ簡潔過ぎると思はれるが――手際よく概論されてゐる。就中佛身論、成佛論は著者の最も力をつくした點であつて、此二章に於て、新しき意味に於て、密教独自の立場を光闡した積りである」と述べてゐる。

其は全く啓蒙的著作とも云ふべきではあるが、初心者にとつて、難解と稱せられてゐる密教々理を一讀の下に了解せしむるであらう好個の参考書であらう。げに著者自身亦その序に於て「本書は勿論所謂隨意の純粹なる研究的述作ではないが、少くとも初心の密教研究者に對しては何らかの寄與と貢獻となすものであらう事は私かに信じて疑はぬ」と斷言してゐる程である。敢て江湖の一讀を薦むる所以である。左にその目次を掲げよう。

第一章 緒 論

第二章 教 判 論

第一節 序説、第二節 顯密二教の教判、第三節 十住心の教判、

第三章 教 理 論

第一節 序説、第二節 六大體大論、第三節 四曼相大論

第四節 三密用大論、第五節 阿字體大論

第四章 佛 身 論

第一節 序説、第二節 大日如來論、第三節 本地身と加持身、第四節 兩部曼荼羅

第五章 成 佛 論

第一節 序説、第二節 成佛への道、第三節 成佛への方法、第四節 成佛への楷梯、第五節 即身成佛 以上
(菊版三四六頁、定價二・二〇、東京甲子社書房)(曉)

宗 教 概 論 江部鴨村著

原始未開の人類の間に發生したる自然崇拜、庶物崇拜等より文化發達の現在行はれてゐる佛教、基督教等に至る迄其は等しく宗教と呼びなされてゐるのであるが、是等多種多様の、嘗て「ありし」又現在「ある」所の宗教に對して、及び是の諸宗教を通じてその内面に存するもの、換言すれば宗教をしてあらしむる所のもの即ち宗教的眞理、そは何であるか？ 此問題は常に人々に解答を要求してゐる。

殊に近時有名な「宗教は民衆の爲の阿片なり」てふ此のマルキシズムの勁銳なる批判的宣言と挑戰的態度とは現代人の視聽を捕へるに餘りにも痛烈な響きで有つた。然してともすれば封建的城塞に夢を結び來し宗教に對して爆彈を投下して、それが清算さるべき運命に立ち到らしめたと云ひ得るであらう。此時に當つて著者は宗教とは何ぞやの大問題を提げて多年の研究と思索の結果得たる解答を最も明快に、簡潔に而も流麗なる筆を以て現代人の前に提供したものが本書である。

本書の目的について著者自ら「題を廣く宗教概論として置いて、廣く宗教一般の理論を組織的に系統づけて見たいと思ふのである。然し私はこゝで堅苦しい學問上の論議を試みようとは

思はない。さういふ事は外に機會もあるだらうし、又外に其の人もあるだらう。私はこゝで何等の規範や形式に煩はされる事なく極めて自由な態度で、而も出来るだけ簡潔に私の宗教觀を述べる事にしたいと思ふ。従つて私の宗教概論は組織や形式に於て或は世の所謂宗教概論と一致しないものになるかも知れない。だからさういふ事は何うでも可い。私は宗教概論の爲に宗教概論を書かうと思つてゐるのでないから」と述べてゐる。而して「又著者は自ら表現の如何はともかく、内容の實質と骨格だけでは多年の研鑽の成果であつて此點だけは充分責任が持つる」と述べて自信の程を示してゐる。

本書は序論、本論、結論、及び餘論の四部より成つてゐる。今左にその内容を簡単に紹介しやう。

先づ序論に於て(一)現代人と宗教について、大體現代人の宗教に對する態度を考察して、肯定的態度と否定的態度とに分ち(二)その否定的態度を取る者の宗教嫌忌の感情の吟味し、次に宗教を研究する態度を考察して、科學的と哲學的の二種に分類する。而して宗教の全き認識とは如何なるものであるかを説いて序論は終る。

次に本論に入つて第一は宗教の要素を考察する。(一)宗教構成の根本要素を考察して、著者は世界觀人生觀(見方)と解脱觀救濟觀(生き方)の二要素とする。而して原始人類の宗教、自然崇拜祖先崇拜より婆羅門教、猶太教、基督教に至る迄を検討し次に(二)佛教の出發點よりその内容、大小乗の分歧點を叙述し

てゐる。

第二は科學的世界觀人生觀である。宗教構成の根本要素を二種に考へた著者は、其が單に宗教のみのものでなくして人間の思想乃至生活内容その物の構成要素でもある事を反省して、宗教の其と宗教以外のもの、其とのケジメを検討する。於是先づ科學的見地に立てる世界觀人生觀を検するに(一)人生の根本問題に關して、之を科學的に見る時茲にダーウィンの進化論の思想より出發する萬有鬬爭觀が成立する。此流れを汲むものは個人主義乃至軍國主義、マルキシズム等である。(二)然るに又之と反對に萬有共存觀も成立する。即ち自己を中心として考へても事に物に無盡の共存關係が考へられる。然して此流れを汲むものが國際聯盟や無政府主義の如きである。かゝる二つの全く相反した世界觀人生觀が生ずるものとせば、一體何れが眞實であるか? こゝに全的統一的の世界觀人生觀が要請されねばならぬ。

第三は哲學的世界觀人生觀である。眞理の具體的内容は抑如何なるものであるか。之を哲學的觀點に立つて思考する時一方ではターレンスの水の論を出發點とする唯物論的な其と、他方プラトオを始祖とする唯心的な其とが可能である。かくてこゝにも二種の相反した生き方が生じて來る。

第四は觀賞的世界觀人生觀。(一)人生其物を觀賞的觀點、換言すれば美的觀點に立つて考察すれば如何であらうか。こゝに考へられるのは即ち唯美的世界觀人生觀である。例へば彼の季

白の如く、或は繪畫彫刻家等の如き是であらう。(二)然るに又之と反對の觀方も成立する。即ち反唯美的世界觀人生觀である。然して此方が寧ろ現實に即した見方とも云へよう。シヨールンハウエルの反唯美的傾向や、厭離穢土欣求淨土的思想が是であると著者はいふ。

第五に全的統一的世界觀人生觀を考察する。如上の種々なる世界觀人生觀が思考されるとせば一體何れによるべきか。於是必然的に何か統一的なものが要請されねばならぬ。こゝで著者は佛教に云ふ體相用の三面の觀察より出發して、全的統一的世界觀人生觀と宗教的眞理との關係を考へ、法界一如の思想より實在の把握に到達する。

第六は聖の理念である。こゝで生命と慾望との考察に出發して、人類の慾望を生物的慾望と文化的慾望とに分類する。かくて此の種々なる慾望の根元に探求して行く時遂にそれは聖慾に迄高揚されねばならぬ。聖こそは宗教的眞理である。されば此の聖慾こそ宗教の依つて立つ所であると叙べてゐる。

第七に聖價値の創造である。聖なる世界に於ける聖なる價値は如何にして創造されるであらうか？ 著者はそれは合掌道だといふ。それは實に無碍道であり絶對自由と絶對價値はそこに開展されて來るといふ。

第八に功利・道德・宗教、について論じてゐる。功利の世界、道德の世界及びその關係を考察して、それを超えた所に宗教的信念の生活を見出し、宗教の白熱的道德性こそ人類社會を向上

せしむる最高の而も自然なる道德と功利の實現されると論ずる。

以上で本論は終り結論に入る。結論として著者は「宗教とは何ぞや」の題下に古來の宗教に對する定義を列れ、宗教的眞理と宗教との關係を思考し、種々なる差別的宗教發生の理由を考察する。かくして宗教をしてあらしむる所の宗教的眞理の考察より「ある」宗教並に「あるべき」宗教を論じて餘りなしと云ふべきであらう。

最後に餘論は大乘佛教の人生觀——特に慾望を中心として——と題する論文である。

以上蕪筆を訶して本書の内容を紹介したのであるが、其は實に宗教に關心を有する者にとつて、好個の參考書であると信ずる。敢て江湖の一讀を薦める所以である。猶本書はもと雜誌「人生創造」に年餘に亘つて掲載されしものを修正して出版したものである。(昭和五年十一月、千葉市寒川新宿、人生創造社發行、四六版二八〇頁、定價一・三〇)(曉)

生物學論 戸坂潤著

ものゝ實質的理解はそのものに實際に携ふことに由つて初めて可能であらう。その意味に於て「生物學が何であるかを最も好く知つてゐる者は、云ふまでもなく生物學者自身」である。併し生物學は諸科學中の一個の科學であるから必然的に他の諸

科學との聯關に於て存在するのであるが、生物學者は一定の特殊領域に彼の關心を集中することに由つてそれが生物學者たる所以であるが、この聯關の吟味を忘れがちなになる。或は生物學の内部そのもの、諸問題のためにそれまで手が及ばないのかも知れぬ。だがまさにこのことに由つて「生物學とは何か」に就て生物學者自身が諸種の側から充分に知らぬことを示す。

元來實證的科學は實證性の故にその研究の歩武を對象に向ける。併しかくして得られた材料を理論にまで展開するには方法へと眼を馳さねばならぬ。方法への反省はこゝに科學論を生む。この「生物學論は正に生物學に就てのさういふ科學論を意味する」從つて生物學論はまづ生物學とは異なる經路に於て生物學とは何かに就て解答しなければならぬ。第一章の「生物學は如何なる科學か」はこれに答ふるものである。さて生物學なる一科學に對して生物學論なる科學論があつたように、諸科學に對しては諸科學論が存する。さうして諸科學論はその本性上一個の科學論に統一されねばならぬ。それは世界觀であり哲學である。かくて生物學は今や生物哲學に對するのである。ここに第二章の「生物學に於ける哲學的諸問題」の解明がある。

× × ×

自然科學が他の諸科學たとへば諸精神科學と異なる重要な一特性は「そこに於て充分な意味での實驗が施し得られる」といふ點にある。さうして生物學はかゝる自然科學に屬する。では生物學は如何なる自然科學であるか。こゝで著者はまづ生物學の

内部の諸分科の聯關、即ち「形態—形態形成—形態轉換といふ一聯の系列を辿る」ことに由つて、形態學・發生學・生理學・遺傳學・進化學の聯關を見極め、それから物理學—自然科學の代表的のもの—生理學を顧みつ、生物學をば「個體記述的で且つ歴史的な自然科學である。」と特性付けてゐる。次に著者は「元來人間そのものが一個の生物であるといふ基本的な事情のために、生物學が世界觀と特別な緣故のある」のを指摘し、前者が後者に基くのと後者が前者に基くのとを區別してゐる。マルサスの人口論のダーキンの進化論への影響がその第一の場合。第二の場合に又二つに分たれ、生物學的知識材料が世界觀に影響を與へたものとしては進化論對クロボキンの相互扶助論及びハーバート・スペンサーの社會學、生物學的—生命的—な物の見方が世界觀を支配したものとしてはシヨペンハウエル、シュリンゲ、……ベルグソン等々の哲學をあげ、さうして第一章を終つてゐる。

第二章は三節より、即ち第一生命の概念・第二生命概念の解釋・第三目的論に就てより成立つ。まづ生物とは生命あるものと考へられるから生命の原因が探究せられ、生物學乃至生理學に依つて實證的に生命現象の原因が種々あげられる。がしかしこれらは畢竟「生命現象の絕對的に必要缺くべからざる條件であることに誤りが無いにしても、逆に夫が生命現象の充分な條件とは限らない。」このことは「生命現象が機械的に理解し盡されるか否か。」といふ問題の提出を意味する。かくて第一生命の

概念より第二生命概念の解釋へと移りゆく。こゝでは、生物の性格は單なる物質ではなく生命なるが故に機械論的には理解しつくされぬから超機械的な活力があらねばならぬといふ活力論（生氣論）と、このような活力は因果律を従つて現在の自然認識を破るから生物はやはり物理的・化學的に説明さるべきであるとなす機械論とが對立する。この二律背反はどうして解決されるか。ドリーシュは實驗上の根據から生物の自律性を證明し「生物は機械的に説明し得ない點を原理上持つてゐる」から「何らかの意味で生命原理が必要である」ことを説きつゝ、嚮導原理としてのエンテレヒーを認めることに由つて「生物の生氣論的説明はその機械的説明（必ずしも機械論的ではない）と少しも矛盾しない」といふ新生氣論を主張して、一應このアンチノミーを解決してゐるようである。しかしエンテレヒーのこの嚮導實現はまさに機械的因果律の完結性との矛盾を暴露してくる。かくて生命概念の解釋の問題は今や「生物學に於て目的論をどう理解するか」に變る。こゝに第三目的論に就てがある。著者はまづカントの目的論をあげる。カントは構成原理としての限定的判斷力ではなく、統制原理としての反省的判斷に由つて、「自然の必然性が必然性を止めることなくして、而も吾々人格の自由なる所産であるかのやうに考へられ」「即ち必然性はそのまゝで自由に對して合目的々な性格を與へ得る」となす。しかしこの合目的性は畢竟「對象そのものに對しては主觀的（形式的）」である。對象そのもの、構造に於て見出される合目的性（自然

目的）こそ、生物がまさにそれであるところの「實質的な・客觀的な・絶對的な合目的性である。」この實質的に合目的々な有機體の「存在は經驗的な・常識的な・先科學的な一つの事實」であり、これがまさに生物學の出發すべきテーマである。「このテーマの解決法は機械的以外にはありえない。」「たゞ機械的に分析を進めるに際して、この合目的性が場合々々のテーマとして方法的に（ドリーシュの場合の様に自然要因といふ對象的なものとしてではなく）統制・發見の原理となる」に外ならぬ。かくしてかの機械論と生氣論とのアンチノミーが初めて解決される。「元來生物は無機物から自然史的に發達し、その過程自身は云ふまでもなく機械的である。」この歴史を遡源すると假定すれば生物は無機物に還元し得られる。しかし「生物はこの歴史を抜きにして直ちに無機物と同一の方法によつて處理され得るのではない。有機體と無機體とは質的に異つた性格」をもつ。このように兩者の「事實上の質的相異と相互の關連とを見過さず而も質的相違を自然史の量的推移の必然的な結果として理解する」のがまさに辨證法である。

最後に著者は云ふ。こゝでは生物學論なる問題は實質的には解決されなかつたが、たゞその問題の所在とその解決の方針とを示唆したと。蓋し「生物學論は一定の定説ではない、一つの問題である。」

因にこれは岩波の生物學講座に屬する。諸彦の一讀をすゝむる。（大友）

論理學概論 二宮源兵著

本書の特徴については著者自身が序言に於いて次のように云つてゐる。「在來我國語にて書かれたる論理學書と異る本書の特色とする所は、アリストートルが論理學を組織するに到つた歴史的思想背景を知るために、ギリシヤ哲學の發達以來アリストートルに到るまでの知識論の變遷を序論に於いて述べた事、各章各節の思惟の連鎖に注意を拂ひ出來得る限り精細に説明を加へた事、演繹法の研究に於いてはアリストートルの眞意を離れざる様努めると同時に、スコラ哲學者達の研究を參考にし、更に彼らの殘せる問題を附加することに努めた等である。」と。

ものはその歴史的背景を通じてみられることによつて内容的となり、その意味に於いてより正しくあるであらう。アリストテレスによつて大成せられた所謂形式論理學なるものが、アリストテレス自身にあつて、今日我々に知られてゐるほどしかく形式的であつたかどうかは疑はしい。恐らくさうではなかつたであらう。それはアリストテレスが論理學を組織するにいたつた歴史的思想背景、さらにはアリストテレスの哲學そのものとのより緊密なる聯關に於いてみなはされると、おのづから現在のそれとは異つてみられはしないであらうか。形式論理學がより生かされてみられはしまいか。著者の序論に於ける努力はその一端として意味あることと思ふ。要するに本書の特徴は

親切丁寧且つ精細なることにかゝつてある。しかし却つてそのために教科書としては——高等學校及び大學豫科等の教科書としてかゝれたものらしく思はれる——不適當ではないかとも思はれる。だが論理學をつきすゝんで精しくやらうとするものは一讀すべきであらう。今その内容を示せば左の如くである。(篇・章のみかゞげ節ははぶく。)

序論は五章に分たれる。即ち知識の起原及び發達、心意と知識、論理學の意義及び限界、思惟の法則、論理學と他の科學との關係。

第一篇は「名辭及び概念」からなり、五章に分たれる。即ち名辭の種類、名辭の內包と外延、賓位語及び範疇、定義、區分と分類。

第二篇は「命題」であり、四章に分たれる。即ち命題の性質、命題の種類、命題に於ける主辭と賓辭との關係、直接推理。

第三篇は「三段論法」であり、五章に分たれる。即ち三段論法の性質、三段論法の原理及び法則、省略三段論法と複雜三段論法、混成三段論法、演繹法の虚偽。

第四篇は「歸納的論理學」であり、九章より成立つ。即ち歸納法の性質、歸納法の假説、觀察、假説、不完全歸納法、因果律の規定に據る歸納法、統計的研究法、歸納的推理の批評、歸納的推理に於ける虚偽論。

因に、出版所は京都平野書店であり、定價は貳圓九拾錢である。(大友)

駒澤大學佛教學會年報(第一輯)

駒澤大學佛教學會

「長い歴史を有つた曹洞宗大學が昇格して單科大學として駒澤大學が認定せらるゝと同時に佛教學會が組織せられ、己に四星霜を経、今や第四回の卒業生を出さんとするに當り、幹事諸士の熱心なる斡旋盡力に由り本會の年報が発刊せらるゝに至つた事は誠に喜に堪へない。(中略)佛教學科全體を統一した學會は大學の精神を貫徹する上に必要缺くべからざる機關として其の組織を強固にし充實せしめなければならぬ。今や年報發刊の運びに至つたのも其の動機は此に在ると思ふ。」是「年報創刊に際して」の衛藤會長の卷頭の言である。

大學が最高學府としてその存立を認容せられてゐる以上、少くともその學術研究の業績を時々發表して之を世に問ふべき義務を有すると思ふ。果して然らばそれが發表すべき自らの機關誌を有たぬといふ事は如何にも物足りなく淋しい事である。此意味に於て本誌の生誕を世と共に祝福したい。

本誌内容は「年報創刊に際して」(衛藤即應)「朝鮮佛教興廢の主因に就て」(忽滑谷快天)、「印度佛教史研究所感」(宇井伯壽)、「宗教的體驗の本質」(若守義孝)、「自己反省」(兒玉達董)、「正法華經と妙法蓮華經との比較」(境野黃洋)、「佛滅年代私考」(林屋友次郎)、「譬喩師と成實論」(水野弘元)、「神なき神の世界」

(増永靈鳳)、「六祖慧能の根本思想」(持田訓)、「佛性考察の一視點」(松添勤成)、「中論の辨證法に就いて」(伊藤高順)、「安慧造唯信三十頌釋に於ける境識俱派の立場」(坂野大宗)の十二篇より成立してゐる。就中宇井博士のは「所感」なれ共斯方面研究者の一指針であり、林屋氏の「佛滅年代私考」は未完なれ共從來の小野、宇井說等以外に新に西紀前五八七年といふ說を主張するもので注意すべきものである。

猶本誌の題名に就いて今少しく何か他に別名が欲しい様と思ふ。勿論其は佛教學會の會報兼研究雜誌であつて衛藤氏も(「上略」)此の年報は會員相互の思想交換、研究の發表に依つて互に啓發し、會の連絡統一を期する機關となるべきものと思ふものであるから」と述べてゐられるが、同時にそれは又駒澤大學文學部全體の機關雜誌であるのではないのであらうか？筆者は斯く解する。何者中に哲學の論文があり、哲學會の報告があるから。然し之は餘計なおせっかいであるかもしれない。夫は兎に角茲に本誌の創刊を祝し併せてその發展を念する。妄言多謝。(菊二〇五頁、實費壹圓、東京府荏原郡駒澤町、駒澤大學出版部發行)(曉)

元朝驛傳雜考

羽田 亨 著

本書刊行の由來を知る爲に著者羽田博士の緒言を左に引用すれば

「明治四十二年七月發刊の東洋協會調查部學術報告第一冊に於て余は蒙古驛傳考と題する一小編を公けにした。(中略)爾來幾度かこれに補正を加へ識者の教を乞はうと思ひつゝも遂に今日に至るまで志を得なかつたのは慚愧に堪へぬ。今東洋文庫で永樂大典の站に關する史料を収めた部を複印するに因んで本論を草し往年論述した所の誤を正し足らざるを補ふ機會を得たのは深く幸とする所である。この一篇の目的とする所は主としてかゝる點に存するから、更めてこゝに元朝の驛傳に就いての總考を試みるのでは無く、前に述べた所と關聯する數個の問題に就いて論述するに過ぎぬ。……………」

本書は七項目より成る。一、緒言。二、「永樂大典所收經世大典站赤門に就いて」に於ては元史を據とし、その後になつた諸書を參照して經世大典の編纂された次第を尋ね、且その材料となつたものに就き論じて、史料としての價值を批評されてある三、「經世大典、元史元典章の站赤に關する記事に就いて」經世大典、元史元典章を比較研究して「これを要するに現行本元典章が少くともその驛站門に關する限り、甚だ多くの刊誤を有する書物であることは到底動かし難き事實で讀者は安じてこれに據り得ない次第である。……………」一方この永樂大典本にも勿論誤寫は存するが然もこれによつて現行本の誤を正し得る點の少なからぬことは研究者にとりて大なる福音と謂はねばならぬ。」と論斷せられてある。四、「驛站の管理」元史、經世大典等の文を引用して元代の驛站管理を中央と地方とに分けて詳論せられてある

以下、五、站官。六、急遞鋪。七、海青牌。④符牌の種類。⑤海青牌制定の時期。⑥海青牌の名稱の由來と形狀。⑦海青牌に附せられた特權と目次を擧ぐれば上の如くである。本書は元代交通制度に關する研究の最高峯をなすものである。斯學研究者に敢て一本を勸む。卷末に圖版四葉がある。(四六倍版、約百十頁、東洋文庫發行)。野上)

前 號 正 誤

十二卷一號所載「西藏研究論文總目錄」の初四頁が前後になりました。(論文題目の頭の洋數字には間違がありません。)

誤 正

一七八	一八〇
一七九	一八一
一八〇	一七八
一八一	一七九